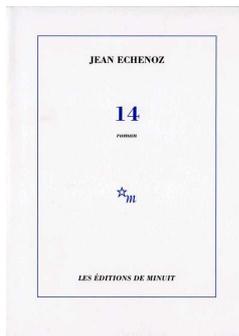


フランス人による小説 推薦 15 作品

フランスの古典作品が確固たる価値を誇る中、今日、日本で翻訳し、出版されるべき作品はどのような作品でしょう。ヌーヴォー・ロマンと呼ばれる流派の後、将来において「古典作品」と認識される作品は、どのような作品なのでしょう。以下の短いリストによるセレクションは少なくとも2つの道を標しています。ひとつは簡素で密度の高い、文体のミニマリズムにおける表現(Gailly, Echenoz, Toussaint)や、つましい暮らしをする人々に声を授ける、社会的なリアリズムを主題にするという選択(Bon, Michon)、あるいは人間の感情の複雑さの探求(Laurens, Mauvignier, Adam)や、その他のジャンルに触れることで新たな道を提案し、ジャンルを刷新する新たなシーンの登場。もうひとつは世界的レベルで、「世界の文学地図」を刷新するフランス領カリブ海域、地中海、フランス語圏アフリカ諸国のフランス人作家たち(Djemai, Mabanckou, Maalouf, Chamoiseau, Confinant)の存在です。

第一次世界大戦開戦から 100 周年にむけて



Jean Echenoz 『14』2012年 Minuit 出版, 123 ページ

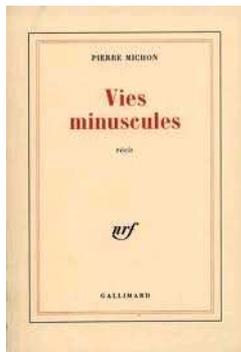
日本語を含む数々の言語（『僕は行くよ』で1999年、ゴンクール賞受賞）に翻訳されている Jean Echenoz は、今日のフランス人主要現代作家の一人です。2014年に開始から100周年を迎える第一次世界大戦を舞台に、作家は前線に送られた5人の戦友たちの運命を通して要点に迫る大作を書き上げました。戦火の闇の中でも登場人物たちの最愛の女性、ブランシュが、物語の複線として一筋の光を与えています。作家は、最初の数ページからこれらの登場人物と戦争への総動員命への不信感を通し、一国の歴史を描き出すのに成功しています。

文学の新たなシーン



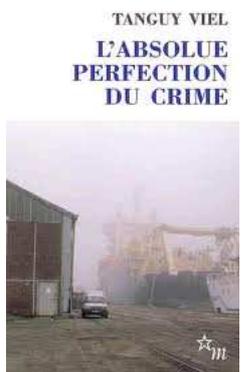
François BON 『Sortie d'usine』1982年
Minuit 出版, 176 ページ

社会のリアリズムとヒューマニティを活用する François BON は今日、労働者の生活に最も寄り添った作家です。悲惨主義に陥ることなく現実を描くことにたゆまず注意しながら、単純作業の繰り返し、職場での事故によって不合理に急転してしまう暮らし、ストライキ、ピラ配り、労働組合、そして退職生活への幸せに満ち足りた約束などを題材に、つましい暮らしを送る人々を生き生きと描いています。フランスに限らず何処にでも見られる工場の世界を正確に描くことで、現実主義文学の新たな扉が開かれています。



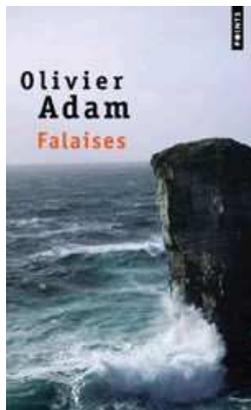
Pierre MICHON 『Vies minuscules』1984年
Gallimard 出版, 248 ページ

『Vies minuscules』に出てくる控えめな登場人物たちによる8つのお話を通して、Pierre MICHON は自分の文体のセンスを明らかにします。この物語ではカトリックの神父、早急に亡くなってしまった姉、文盲の老人、そしてリセの友達である、2人の兄弟が登場します。場所の指定のないこれらの簡素なストーリーは、作家自身の自伝を辿ることで趣旨がわかってきます。永遠に心につきまとう死者の存在が暴かれ、それとなく暗に、作家の経歴と肖像が浮かび上がってくるのです。



Tanguy VIEL 『L'absolue perfection du crime』2001年
Minuit 出版, 176 ページ

ヌーヴォー・ロマンの、そして文学と映画の対話の後継者である Tanguy Viel は、今日特筆すべき作家の一人です。公然とシネマ・ノワールからの影響を受けた作家は、読者を推理映画の世界に引き込みます。この小説はブルターニュのギャングによるカジノ強盗をめぐる物語です。しかし、傑作映画でよくみられるように、この強盗のエピソードは、ブルターニュとその海辺の景観の雰囲気語る題材に過ぎません。欠落、希望、矛盾を抱えた家族の肖像を描き出す機会でもあるのです。まるでジャズ音楽を背景にした、フィルム・ノワールのようなリズムを持つ小説です。



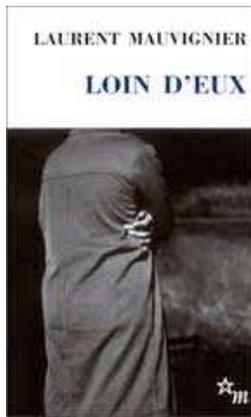
Olivier ADAM 『Falaises』2005年
L'Olivier 出版, 216 ページ

自伝的作品『Falaises』は、語り手がまだ子供であるにも関わらず、母の自殺まで時間を遡って語られる作品です。何がこの女性にエトレタの絶壁から身を投げさせたのか。母の不在からどのように一人の男として成長していくのか。母の自殺という悲劇から年月を経てなお、問いは文体に生気を与え続けます。母の亡霊は、後の最愛の2人の女性の死と重なり、絶えず存在しているのです。



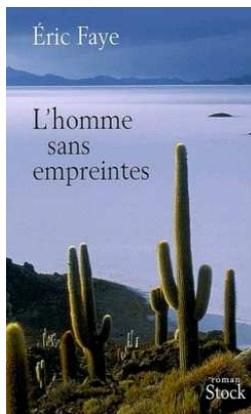
Camille LAURENS 『l'amour, roman』2003年
P.O.L. 出版, 268 ページ

愛が往々にして小説の原動力であるとしたら、唯一の主題が愛である小説とはどういったものなのでしょう。語り手の考察を通し、読み手を愛に関する感情に浸らせる物語は、読者をこのような問へと誘い、女性の視点からみた愛の、言葉にされない欲望、期待を理解するために、まるで再び恋愛小説の古典作品（ラシーヌ、フロベール、ラ・ロシュフコー）を読み返すかのような作品になっています。



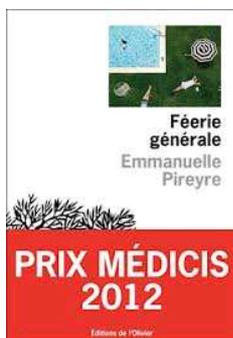
Laurent MAUVIGNIER 『Loin d'eux』1999年
Minuit 出版, 128 ページ

世代間でのコミュニケーションの断絶を描いたこの小説は、故郷を離れ、家族《「あいつら」から遠く離れて》(タイトルの意)家を出る青年、リュックを描いた物語です。読者は読み進むうちに、彼がパリで給士のアルバイトを始めることを知ります。この別離は、主人公が自殺に至るまでの沈黙によって強調されています。青年の死は、人々の間のコミュニケーションが不可能であること、タブーと秘密の重圧、言えない事柄を垣間見せます。Laurent MAUVIGNIER の処女作、『Loin d'eux』は、言葉に頼ることなく、破壊的な秘密を扱うことで繊細な領域に触れる、心理小説の傑作です。



Eric FAYE 『L'homme sans empreintes』2008年
Stock 出版, 258 ページ

2012年、京都のヴィラ・九条山(フランス政府によるアーティストレジデンス)でレジデンス滞在を経験した Eric Faye は、小説『Nagasaki』でアカデミー賞を受賞した、多作であると同時に才能ある作家です。『L'homme sans empreintes』(「指紋の無い男」の意)では、手掛かりを数々用意して混乱させることで読者の関心を挽きつけ、離しません。中央アメリカからバルト海を舞台に、数人が、いくつものアイデンティティを持つ作家、オズボーンの仮面を剥がそうとします。ナチス・ドイツの焚書からベルリンの壁崩壊後に旧東ドイツの秘密警察、スタージが行った記録文書の抹消行為に至るまで、20世紀全体にまたがる歴史に追跡された男への追跡捜査は、少しずつパズルのピースを埋めていくように進められます。『シエラ・マドレの秘宝』の謎多き作家、B. Traven から着想を得て FAYE が造り出したオズボーンという人物は、作家自身と作家が作り出す登場人物との隔たりについて、ひいては作品を通して作家自身は自伝を書きうるのか、という問を投げかけます。



Emmanuelle PIREYRE 『Féerie générale』2012年
l'Olivier 出版, 256 ページ

2012年のメディシス賞受賞作品『Féerie générale』は、小説を“からかう”ような作品で、深みのある物語でありながらも、もったいぶった作品ではありません。語り、話し言葉、SMS、Eメールを繋いだモザイク形式を使って、Emmanuelle PIREYRE は現代における日常の現実、エクリチュールの現実についての流行に通じた作品を書き上げました。ストーリーと、EメールやSMSの会話を混ぜ込んだ『Féerie générale』は、彼女が問いを投げかける、現代性のたとえなのです。登場人物のひとりひとりを結びつける社会事件から成り立つこの作品では、ユーモアがストーリーを導いていると言えるでしょう。

フランス領カリブ海域



Raphael CONFIANT 『Nuée ardente』 2002 年
Mercure de France 出版, 321 ページ

クレオリテ（クレオールアイデンティティを明らかにし擁護する文芸運動）の地であるカリブ海地域は、歴史的にも自然災害に見舞われてきた地域です。1902年、5月8日、前代未聞の巨大な火山の噴火は、マルティニーク（カリブ海の島でフランスの海外県）の県庁所在地であったサン・ピエールを破壊しました。3万人の命が瞬時に奪われましたが、地下牢に閉じ込められていた死刑囚、シパレスだけは命拾いをしたのです。白人、ムラートと呼ばれる白人と黒人の混血児、そして黒人との間の激しい衝突から成る、豊かで色彩溢れるクレオールの世界は、決して消え去ることはありません。

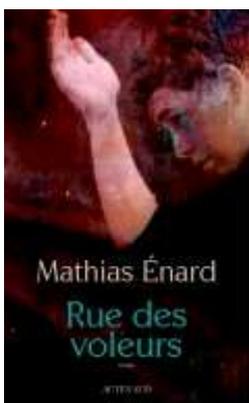
『Nuée ardente』は、マルティニークに対する真の賛歌なのです。



Patrick CHAMOISEAU 『L'Empreinte à Crusoe』 2012 年
Gallimard 出版, 255 ページ

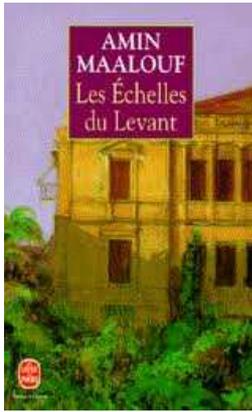
ウィリアム・デフォーによる小説『ロビンソン漂流記』、あるいはミッシェル・トゥルニエ（『ロビンソン・クルーソー』を下敷きにした小説を書いた仏小説家）による寓話を元に、クレオールの考察を加えた作品です。ロビンソン・クルーソーは無人島で20年を一人で過ごしました。自身の均衡を図ろうと今朝も毎朝浜辺で行っている散歩に出かけますが、その時、思いもしない物一人間の指紋一を見つけるのです。

地中海



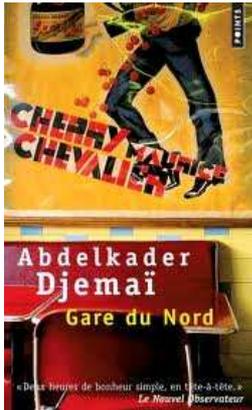
Mathias ENARD 『rue des Voleurs』 2012 年
Acte Sud 出版, 256 ページ

愚直ではありますが聡明で毅然としたラクダールが、過去2年の自分の人生を振り返ります。彼ぐらいの年齢の青年の誰もがそうであるように、ラクダールも自分の人生を生き、人を愛したいと思っていますが、何よりも自由に生きて憧れの理想郷、ヨーロッパに行くことを熱望しています。彼は、モロッコ、チュニジア、スペインを旅する間にアラブの春、マラケシュのテロ、経済危機など、時の現状に対面します。個々のアイデンティティが問われるグローバルイズされた世界への、素晴らしい手解きとなる小説です。



Amin MAALOUF 『les Echelles du Levant』 1996 年
Grasset 出版, 298 ページ

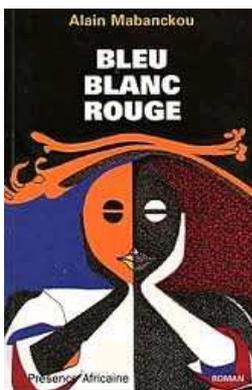
アラブと欧州の 2 つの世界に跨り活躍する、アカデミー・フランセーズ会員のレバノン系フランス人、アミン・マルーフほど人々を引き裂く国境の愚かさを語るのに最適な人物はいないでしょう。彼の傑作、『les Echelles du Levant』は、フランスで出会ったものの戦争の狂気に引き裂かれたレバノン人の学生と、レジスタンスの若いユダヤ人女性とのラブ・ストーリーです。2 人はこのように別れ別れにはなっていましたが、引き裂かれた 2 つの人生の光となる娘が誕生します。



Abdelkader DJEMAI, 『Gare du Nord』 2003 年
Seuil 出版, 90 ページ

アルジェリアはオランに生まれ、パリに移住した Abdlekader Djemai は、アルジェリアとフランスを証言する作家の一人であり、儉しい暮らしをする人々の生活を語るに長けています。この短い小説で、作家はパリの“アラブ地区”、ラ・グット・ドールに住む年老いた年金暮らしのアルジェリア人労働者たちの、質素ですが幸せな暮らしを描いています。読者は、ひとりひとりの小さな寝室がある“宿泊所”から、彼らが常連となっているカフェ“ショップ・ヴェルト”、そして、3 人が飽くことなく足繁に通うパリの北駅を舞台とした、老人達の、庶民の界隈を垣間見ることができます。そして主人公 3 人の思い出、ささやかな喜びや恐れ（“物乞い、乞食になってしまわないか” “祖国から遠く離れて死ぬことになるのではないか” …）を通して、彼らの動向を追うのです。

アフリカ



Alain MABANCKOU 『Bleu-Blanc-Rouge』 1998 年
Presence africaine 出版, 224 ページ

2006 年にアフリカを舞台にした短編小説、『Memoire de Porc-Epic』で Renaudot 賞を受賞する以前から、Alain Mabanckou はアフリカの若者の彷徨を描く作家としてその地位を築いていました。コンゴの青年、マサラ-マサラは、何年も前に学業を放棄しています。彼はシャルル・モキのように、成功の確立を意味するパリに行くことを夢見ています。モキは、限界で“大物”とみなされる一人であり、乾期のバカンス中にパリから帰国するモキに無関心を装う者は誰もいません。新たな世界に飛び出したマサラ-マサラは、現実伝説より残酷で、断ち切れない悪循環から脱出するためには自力でやっていくしかないと悟ります。1998 年に Presence africaine 社によって出版されたこの処女作『Bleu-Blanc-Rouge』で、Alain MABANCKOU はブラック・アフリカ賞の大賞を受賞しています。